



TITLE:

<学生の声> 「身近を見直す」

AUTHOR(S):

中田, 陽介

CITATION:

中田, 陽介. <学生の声> 「身近を見直す」. Cue 2013, 29: 63-63

ISSUE DATE:

2013-03

URL:

<https://doi.org/10.14989/176903>

RIGHT:

学生の声

「身近を見直す」

工学研究科 電子工学専攻 北野研究室 博士後期課程2年 中 田 陽 介

私が大学院工学研究科のある西京区に移り住んでから、早四年が経とうとしている。はじめの2年間は、大してこの土地に目も向けずに暮らしていたのだが、住み慣れてから少しずつ身近を探索することで、西京の魅力に徐々に気がついてきた。現代のめまぐるしく変化する社会の中でも、西京では比較的ゆっくりとした時間が流れているように感じる。町の人は親切でやさしい。こういう匂いを嗅ぎ取ってか芸術家もたくさん暮らしている。

あまり知られていないことであるが東山に劣らず素晴らしい寺社もたくさんある。花の寺の別名を持つ勝持寺、春日大社の分社として知られる大原野神社、西国三十三箇所の一つである善峯寺など、例をあげれば枚挙にいとまがない。それぞれの場所には土着の物語が染みついている。こうした物語を集めることで歴史がより身近に感じられるし、自分と土地との結び付きも得られる。また、文化面のみならず、非常に自然豊かな土地でもある。大原野の里山風景は見る者の気持ちを穏やかにするし、かの紫式部も歌に詠んだとされる小塩山に登って京を見下ろせばまた違った視点から自分たちのいるこの町を見直すことができる。このように自分にとって身近な場所に対して、少しずつ魅力を見つけていくことは私にとってこの上なく楽しい。

これは私の研究にも当てはまることである。自分にとって身近と感じる研究対象を何度も何度も見直す。ある時には普遍的な概念が頭の中で整理され、山の上に立つように一気に広い世界が見渡せるようになる。こうした過程を繰り返しているうちに、はじめはいつもと変わらない見慣れた風景だと思っていたものも、すっかり見方が変わって別の世界にやってきたような感覚になる。こういうときに、ああ、研究はおもしろいな、と感じるのである。みな気が付かない身近な所にこそ宝が眠っている。

「博士課程への進学を決意した理由」

工学研究科 電気工学専攻 篠原研究室 博士後期課程1年 石 川 峻 樹

私が博士課程への進学を検討した理由は、今現在行っている研究が非常に面白いと思っており、少しでも長くこの研究に携わっていたいと感じたためである。これが全ての理由ではないものの、博士課程への進学を検討した、最も大きな理由である。一方で、研究への興味という理由だけでは、博士課程へ進学することを決意はしなかったのも事実である。せっかくの機会なので、博士課程への進学を決意した理由をいくつか書いてみようと思う。

一つ目の理由は、先輩から言われた一言である。その内容としては、博士課程はできるかできないかではなくてやるかやらないかだ、というものであった。この一言は、博士課程に進学できる能力があるのかと悩んでいた自分には、本当に進学する覚悟があるのかと問われたように感じた。この言葉を言われてからは、自分には能力が無いと言われたらあっさりと引き下がるのか、それでもやっぱり進学したいと答えるのか、といった自身の進学に対する意志というものをよりしっかりと考えるようになった。二つ目の理由は、本当に進学をしたいのであれば応援する、という両親からの言葉である。両親は家庭の事情から進学をあきらめた、あるいは就職してから進学してもっと勉強しておけばよかったと感じた、といった経験があったため、進学をしたいのであれば応援すると言ってくれたそうだ。この言葉を言われてからは、本当は就職をしなければならないのではないかと考えた考えに囚われずに、自分が本当にしたいのは就職・進学のどちらなのかをより冷静に考えるようになり、進学を決意するに至った。

以上の二つは私が進学を決意した理由の中で、最も大きなものであり、このように考え、悩んで、決意し、進学した博士課程という時間を、大切に過ごしたいと思う。